

# 協同の公園実態調査に基づく防犯まちづくりに関する研究 - 福岡市城南区の福岡大学周辺を対象地として -

福岡大学工学部社会デザイン工学科  
福岡大学工学部社会デザイン工学科

学生会員 淡島正憲  
正会員 柴田 久, 石橋知也

## 1. はじめに

### (1) 研究の背景・目的

犯罪の被害に遭わずに安心して暮らせる社会は、多くの地域住民の願いであり、生活の基盤となる。特に、女性や子どもの安全・安心については大きな関心が寄せられており、防犯に対する地域全体の取り組みも必要となっている。福岡県では平成 14 年度までの犯罪認知件数の急激な増加にともない、警察を中心として上記に関する様々な取り組み<sup>1)</sup>を行ってきた。その成果として、犯罪認知件数は年々減少の傾向にあるが、性犯罪や強盗といった犯罪においては、ほぼ横ばいとなっている。現在、福岡県警察と福岡大学、並びに独立行政法人建築研究所では、地域全体で取り組む大学周辺を対象地とした、協同の防犯まちづくりプロジェクト（以下、本プロジェクト）を進めており、地域の重要な公共施設である公園を中心に周辺環境の現状把握と防犯検討に取り組んでいる。

本論では、本プロジェクトの活動内容を示すとともに、これより得られた成果と防犯まちづくりを進めていくうえでの要点を模索することを目的とする。

### (2) 研究の進め方

前項の研究目的を受け、本研究の構成について示す。まず第 2 章では、わが国における防犯まちづくりの状況と本プロジェクトのプロセスについて詳述した。第 3 章で、公園利用の実態を把握するために実施した公園に対する意識調査（以下、アンケート調査）の概要を示し、続いて第 4 章では、公園の現状を把握及び共有するために実施したワークショップ（以下、WS）の概要を示した。これらの結果を踏まえ第 5 章で考察を行う。第 6 章では、地域全体で取り組む防犯まちづくりのあり方について展望を述べた。

## 2. 防犯まちづくりの概要

### (1) 防犯まちづくりを巡る状況

2008年3月に、国土交通省は防犯まちづくりを推進するため小冊子<sup>2)</sup>を作成している。ここでは、防犯ま

ちづくりにおいて、地域の状況に合わせる 地域の関係者が協力・連携する 楽しく取り組む 総合的に進める 計画的に長期的視点をもって進める、以上のことに配慮して取り組むことが重要であるとしている。

一方、前述した建築研究所によると、わが国では国や自治会の関与のもとで行われている防犯性の高いまちづくりの実績はまだ少ない<sup>3)</sup>と指摘している。

### (2) 本プロジェクトのプロセス

本プロジェクトは、福岡県警察主導のもと福岡大学や建築研究所が協同して取り組み、福岡県防犯設備士協会などの支援を受け進めてきた。その過程でアンケート調査やWSを実施し、対象地の利用状況や現状及び課題を把握した。これらの結果報告と同時に住民や自治会、行政などを対象に防犯をテーマにしたシンポジウムを開催し、地域全体の情報の共有を図った。

## 3. 公園に対する意識調査の概要

対象地内にある公園の現状を把握すべく、対象地内に立地した4つの小学校（金山小学校、七隈小学校、南片江小学校、片江小学校）に通う児童に対しアンケート調査を行った。回答は、児童の保護者が代わりに行う形式となっており、全ての小学校を合わせ回答数は849件となった。以下にアンケート調査の概要を述べる。まず、自宅から近い公園を3つ選択してもらい、表-1に示す8項目について、選択した3つの公園毎にそれぞれ回答してもらった。項目5については複数選択可能、項目6・8については自由記述形式となっており、意見の傾向を分類把握している。項目6については、以後「子ども対象事案の伝聞」と総称する。

## 4. WS の概要

WSの目的は、防犯診断と情報の共有である。防犯診断では、夜間のくらがり調査、公園の空間構成及び周辺環境の実態調査を行い、これらの結果をA0の地図にて記入しながら共有した。WSへの主な参加者は対象地域内の住民、福岡県警察、行政、福岡県防犯設備

表-1 公園に対する意識調査の項目と内容の対応表

属性	項目	内容
調査公園の 利用状況	項目1	学校名、学年、性別、回答者の続柄
	項目2	裏面の地図を用いて、自宅から近い公園の番号を3つ選択
	項目3	自宅から選択した公園までの距離
	項目4	公園に遊びに行く頻度
	項目5	公園でする遊びの内容
	項目6	子どもが物を取られたり、体に危害を加えられたり、いやらしいことを言われたりされたりしたという話を聞いたことがあるか
	項目7	公園でどの程度安心して遊ばせることができるか
	項目8	防犯面から見た公園の良い点、悪い点

士協会、福岡大学である。なおこれらの調査は、参加者を均等に振り分け1班8名程度で5班作成し、1班当たり2つの公園を回るようにして行った。

## 5. 結果・考察

### (1) アンケート調査からの考察

項目 8「防犯面から見た公園の良い点、悪い点」に着目して、項目 6「子ども対象事案の伝聞あり」の割合が高い公園と項目 7「安心して遊ばせることができる」の割合が低い公園を比較すると、前者では「樹木やトイレ設備により死角がある」などハード面に関する悪い点が多く挙げられていた。一方後者では「公園の利用者が少ない」など公園内または周辺に人がいないことに関する悪い点が多く挙げられおり、ハード面に関する悪い点は少ないことが把握された。このように、たとえ利用者が多くとも、公園内で樹木や遊具により監視性の低い場所がある場合に対象事案は起こりうるが、住民の公園利用時における安心度は利用者数などに関しての監視性によるところが大きい。すなわち、住民は対象事案が実際に起こっている場所の特徴、または対象事案を誘発しうる死角といった、よりハードの情報が不足していると推察される。認識の改善や対象事案の減少を図るには、本プロジェクトを通して警察が公開している犯罪発生箇所の情報の認識向上を促すことも重要な施策と言ってよいだろう。

### (2) WS からの考察

調査を行った公園のうち七隈と神松寺北という 2 つの公園を見てみると、看板によってボール遊びの禁止を呼びかけているにも関わらず、広場には高いフェンス、意図の分からないブロック塀がある。反対にボール遊びを許可しているエリアではフェンスが低いなど、利用実態を考慮または把握できていない整備が散見された。このような現状は、行政などに比べ利用している地域住民の方が気付きやすいが、住民だけでは対応できないハード整備の問題である。今回の本プロジェクトを通して、住民と行政が意識や情報を共有し、公園の利用実態を把握したうえで整備を行い、死角の削減や見通しの確保、適切な利用への誘導を促すことが

期待される。

これに対して、公園内の照度が高く良い意見が多い七隈菊池公園の調査結果を見ると、公園内の明るさ確保によって公園内の見通しが悪いといった意見は少なくなっている。一方、周囲との照度の差が大きくなっており「周辺にある駐車場が暗い」、「周辺に管理されていない空き地がある」など、周辺環境への不安がより高まっていることが把握された。このことから、公園内の照度の向上を計る際には、単純に街灯の個数や照度の高い物を設置するのではなく、公園内の見通しの確保や樹木の適切な配置を考慮したうえで、周辺の照度環境を踏まえた整備が利用者の対象事案への不安を解消することに貢献できよう。

## 6. おわりに

本プロジェクトを通して地域全体で防犯の知識や地域の現状を共有できたことは、防犯まちづくりの観点からも非常に有意義であったと言える。警察と住民それぞれが持つ情報を共有したことで、効率的な自主防犯活動や犯罪対策が可能となり、協同によって今後のさらなる発展が期待できる。また、本プロジェクトによって草木の繁茂や街灯の故障など、地域内に多くの管理不足があることを共有できた。周辺住民は地域内の環境変化に気付きやすい立場にあり、住民と行政が協同関係を築くことは、これら地域の実情を早期に行政に伝えられる有効な手段である。以上のことより、防犯まちづくりにおいては、警察や行政と地域住民との連携が非常に重要であると言える。

他方、本プロジェクトへの大学の関与は、大学が普段から築いている地域とのつながりを活かすこと、さらには警察と地域間の円滑な連携や住民の積極的な参加を促すことに寄与した。このことより地域全体で取り組む防犯まちづくりにおいて、第三者の立場である大学が主体間をつなぐ触媒としての役割を担う可能性を見出せたのではないかと。

### 補注・参考文献

- 1) 福岡県警察：生活安全総務課，安全安心まちづくり推進室，県内の犯罪情勢と協働活動による防犯対策について
- 2) 国土交通省：安心して暮らせるまちにするために～地域防犯活動からはじめるまちづくり～，  
<http://tochi.mlit.go.jp/generalpage/1004>
- 3) 独立行政法人建築研究所：建築研究資料，No.134，2011